

## 事実と想像の区別

当診療所には、医学部5～6回生の学生が2週間の予定で時々研修にくる。彼らと話しをしていると、大学では学習すべきものが多すぎるためか、物事を理解しないで受け入れていることが多い。一言で言えば、事実と想像を区別せずに、自分の知識としている印象である。

薬を飲んだ。病気が治った。薬が効いた。は有名な「さんた」理論である。このなかで、事実は「薬を飲んだ」こと、「病気が治った」ことであり、「薬が効いた」は本人の想像（思いこみ）である。薬を飲んだことと病気が治ったことの相関関係については、同じ症状の患者さんを100人ずつダブルブラインドで偽薬群と実薬群に振りわけて統計的に調べることはできる。

また、結構多くの患者が、「ふらふらするので、血圧を測定すると高かった」から、高血圧のせいでふらふらすると訴える。これも「ふらふらする」と「血圧が高い」のは事実であるが、相関関係についてはどうだろうか？何らかの原因でふらふらし、体内からカテコラミンが放出されて、血圧が上昇したと考えることもできる。血圧が高いから、ふらふらするというのは患者本人の思い（想像）であり、正確には「血圧のせいでふらふらすると私は思う」。である。その場合、担当した医師は、血圧上昇と症状の相関関係を客観的に判断しなければならない。

ちなみに、「憲法9条のおかげで日本は戦後平和であった」。というのは、「平和であった」ことと「憲法9条が存在した」ことは事実であるが、この2つに相関果関係があるかどうかの判断は不可能である。歴史を、時代背景を同じにしてダブルブラインドで検証することは不可能であるからである。

(2015 11)

伊賀幹二  
伊賀内科・循環器科